

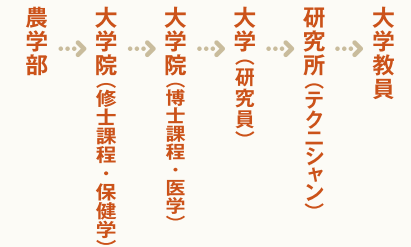
「面白そう」という
好奇心が、
自然と進路を
引き寄せていった。



Role Model 07

文東美紀

大学院生命科学部准教授



Profile ぶんどう・みき 1994年日本大学農獣医学部卒業、1996年 東京大学大学院医学系研究科修士課程修了、2000年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。理化学研究所テクニカルスタッフ、東京大学教員を経て、2016年から熊本大学に着任、同年からJSTさきがけ研究員(兼任)

興味のおもむくまま 好き勝手に実験していた学生時代

中学生までは、文芸部に所属して小説や劇を作ったりするような文系人間だったので、理系研究者になることなど考えたこともありませんでした。しかし、高校2年生のときに甲状腺の病気になったことをきっかけに、理系の世界に興味を持つようになりました。当時は「バイオテクノロジー」が新しい技術としてもはやされていた時代。大腸菌にヒトのインシュリンを作らせる技術などに興味を持ったため農学部に進学しました。新しい技術に引き寄せられがちなのは、今と変わらない傾向のように思います。

率直に言いますと、学生時代は勉学に熱心な大学生だったとはいえ、サークルのオーケストラ活動ばかりに熱中していました。研究室に配属されてからも、教わった実験方法以外にも良い方法があると思ったら勝手にいろいろ試してしまうような学生でした。大概はうまく行きませんが、まれにとってもいい結果が出た時はとても嬉しかったことを覚えています。そんな勝手な学生を、中には評価してくださる先生もいらっやだったので、それが励みにもなりました。

しかし、若い時に所属した研究室には周りに優秀な研究者が多かったので、自分が研究をする必要はないのではないかと考えるようになり、学位取得後は他の研究者の実験を手伝う「テクニシャン」を長く務めてきました。ただその時の仕事を評価していただき、今の研究者としてのキャリアにつながりました。進路というものを計画的に考えずにここまで来てしまったのですが、その時々面白そうだと思ったことを一生懸命やったことが、次の進路を引き寄せることにつながったのではないかと考えています。

世界初のデータに 触れたときの高揚感

現在は、統合失調症や躁うつ病などのような精神疾患の原因について、新しい観点から研究を進めています。これまで、ある一人のヒトのすべての細胞は、同じDNA配列を持っていると考えられてきました。しかし近年、ヒトの脳の細胞のDNAは、一つ一つの細胞で少しずつ違っていることが分かってきました。その脳細胞のDNAのわずかな違いが、精神神経疾患の原因になる可能性があると考え、研究を進めています。

研究者は単調作業も多く、なかなか結果が出ない時期が続くこともあります。ほんのときおり、まだ誰も見たことがない……と思われるデータを見る瞬間があります。「世界で私だけが知っているかも知れない」そんなDNAの振る舞いを見つけると、やはり感動します。

情報過多の社会のなかで 「流されない」ためには

研究者は同じメンバーと長時間顔をつき合わせる機会が多く、考え方や価値観が偏ってしまいがちなので、

プライベートでは意識的に趣味のコミュニティに参加するなど、他の世界を持つことでバランスをとっています。視野が広がるきっかけにもなるので、私生活も思い切り楽しむよう心がけています。私が学生だった頃に比べ、今は格段に情報量が多くなり、AIによる情報処理なども身近になりつつあります。便利になった反面、雑多な情報に流されやすい状況にあるのも事実。こういう時代だからこそ、今の学生には「自分の頭で考え、自分の手で実行し、それを自分の言葉で発信すること」を大切にしてほしいと願っています。



研究室にて

10年後の
目標は？

精神疾患は、残念ながらまだ原因すら分かっていない状況です。10年後には、原因の一端でも解明が進み、新しい治療法が開発されているような状況を目指しています。

楽器(クラリネット・ハーブ)を演奏することが大好き!